

# 三年大工 — 渡部俊治【前編】

古くから林業が盛んだった山形県金山町で、  
伝統的な技法をかたくなに守って  
百年住める家づくりを続ける大工職人・渡部俊治。  
わたなべしんじ  
杉の素材としての特性に精通し、品質にこだわり、  
時に二軒の家を建てるのに三年以上を費やすというその流儀から  
「三年大工」の異名を持つ渡部の、仕事への心構えを聞いた。



金山杉の特性を知り、最適な箇所最適な部材を用いる。木と家を大事にする渡部棟梁の姿は一貫している。



明治から大正期につくられた金山型住宅

## 『適材適所』の家づくり

「適材適所」という言葉がある。今日では「人材の能力・適性を見極めて、ふさわしい地位や仕事につかせる」ことを指すのが一般的だが、改めて字面をよく見れば「材」は木材の「材」。すなわち、家を建てる際に「この柱にはあの木を、その梁にはあの木を…」というぐあいに、材質の特性と使いどころを適合させるという考えが本来的な意味だということに気づかされる。山形県金山町で大工を営む渡部俊治の家づくりは、まさに「適材適所」を旨とする。

その箇所に適した木材がなければ、工期を先送りしても最適な材料がそろわないのを待つ。釘やボルトなどは使わず、手間のかかる伝統工法で建てるため、家一軒に二年、三年かかるのも珍しくはない。人呼んで「三年大工」。経済性・合理性ばかりを重視する今の時流には合わないと思われても不思議はない。

「木と木の組み合わせだけで何百年も持たせるのが、神社仏閣の建て方。我々の建てる家は、何百年は無理かもしれないけども、伝統建築の技術も取り入れて、百年はちゃんと住める家にしてるんだ。お客さんと木のことを思えばこそ『三年』。そこが他の家とは違うところ。百年生きた杉を、木材としてまたさらに百年活かす。それが私ら大工の任務、使命だと思ってるでな」  
確かに三〜四カ月で建つ家に比べれば、一時的なコストは割高かも知れない。しかし百年の間、何世代にも渡って一軒の家を受け継いでいける財産をつくると考えれば、決して割に合わないものではないのだ。

## 金山杉で家を建てる匠の心意

金山町は、山形県の東北部、秋田県との県境に位置する山間の町である。江戸時代から参勤交代の宿場町として栄え、明治期にはイギリスの女性旅行家イザベラ・バードがその旅の途上

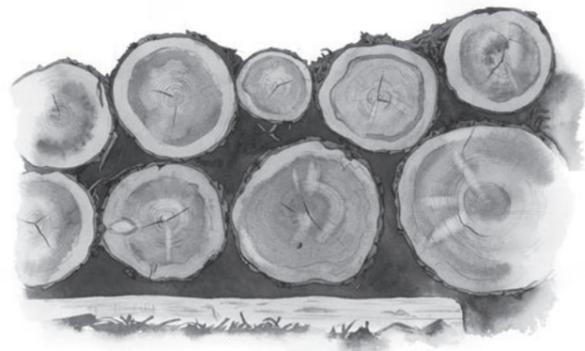


わたなべ・しゅんじ●昭和24年生まれ。金山町で七代続く大工の家で育ち、18歳で親類の宮大工に弟子入り。その後日本住宅の建て方も学び、31歳の時から地元金山町で大工となる。伝統工法による金山型住宅の普及に尽力し、現在は新庄最上建設総合組合の金山支部長を務める。

「百年生きた木を使って、百年もつ家を建てる。」

「木はほんとに偉いよ。空気をきれいにし、緑で我々の目を和ませてくれるし、山に生

えてれば治水の役割もしてるわけだからね。木材として伐る前からこんなに人の役に立ってるその木を、二三十年もてばいいなんて使い方はしたら木に申し訳が立たんでしよう」



金山杉の断面



左/古い家屋を解体した木材。かなり年数を経たものだが、ほとんど劣化せず継手部もしっかりしている。釘を使わず木組みでたてれば、金山杉は驚くほど長持ちする。右/いずれも60m級と国内トップクラスの樹高を誇る「大美輪の大杉(おみのわのおおすぎ)」。樹齢最大280年だが、身がしまっているため幹の太さは2~3m程度だ。

で逗留したことでも知られる。また一方で、金山は古くは江戸・宝暦年間に新庄藩の主導で植林を行っていたという記録も残っている林業の町でもある。町の郊外には、推定樹齢二百八十年、樹高約六十メートルの杉の巨木が文字通り林立している。夏は高温多湿、冬は二メートルの積雪に見舞われる豪雪地帯で育った「金山杉」はゆっくと均一に生長するため、年輪のきめが細かく、住宅に用いれば、雪の重みをものともしない丈夫で耐久性にすぐれた建材となる。樹齢八十年以上の金山杉は、今や木材の高級ブランドとなりつつある。

「初めはほんとに宮大工になりたかったんだけど、そんな事情で日本建築に転向したわけでもその宮大工の修業が今も相当役立ってるな。古い木造の家を解体したらわかるけども、釘を打ったそのまわりが腐食してぼろぼろになってる。つまり鉄は木をダメにするってこと。神社仏閣の建築ってのは、木を本当に大事にするから、釘を一切使わずに木の組み合わせの技術だけで建てるわけだな」

木を二度生かす

「我々大工はね、『木は二度生きる』って言う

渡部俊治はこの金山町で生まれ育った。もとより林業が盛んな土地柄、大工を生業とするものも多かった。渡部の生家も彼の代で八代目となる大工一家。幼いころ、苦勞続きの父の背中を見て「大工にはなるまい」と思っていた。とはいえ、やはり血は争えない。

「金山杉」を使い、切り妻屋根や漆喰の白壁などの特徴的な外観を備えたこの地方ならではの民家を「金山型住宅」と呼ぶ。現在、渡部が請け負っている仕事のほとんどは金山型住宅だ。「ふつうの杉ってのは、だいたい五、六十年で伐るんだな。でも金山杉は九十年、百年と大きく育ててから伐る。木は中の方はやわらかいけども、年数を重ねるほど年輪が外側に緻密に巻かれていくんだな。年輪ってのは、幅が狭ければ狭いほど丈夫になる。だから、金山杉でつくった家は頑丈なんだ」